



風鈴の音

医薬経済社
坂口 直

猛暑が続いている。滝のように噴き出る汗に辟易するなか、そよ風が風鈴を鳴らす。心地よい音色は一服の清涼剤かもしれないが、筆者を含め大多数の人々にとっては、やはり「夏のボーナス」だろう。ただ、各メディアが集計する大企業のボーナスランキングは、爽やかな気分を一掃してしまうので、読み飛ばそうと必死なのは筆者だけかもしれない。

結局、好奇心に負けてランキングを眺めて呆然とする筆者をよそに、拙宅には、「安かろう悪かろう」ではなく、「安かろう悪くなかろう」製品が並ぶ。家具一式は「お値段以上」の会社、日用品は「百均」、衣服は「ファストファッション」。休日は家族でショッピングモールへ出かけ、フードコートで牛丼、ハンバーガーなどをいただく——。このご時世、何が起こるかかわからないので、気付けばせつせと「低コストオペレーション」に励んでいる。

ただ、筆者のような小市民が安さを享受しているのも、単に海外の安価な人件費や材料費などによるものだ。真偽のほどはわからないが、例えば、ファストファッションでいえば、従業員は劣悪な環境下で働かされ、工場からは化学染料が川に流れているという。何だか申し訳ない気持ちになってしまうが、対策を打ち出そうとする国もある。「世界の工場」といわれる中国だ。習近平国家主席が環境対策に乗り出し、劇的な変化が起きている。

伝聞するところでは、当局が取り決めた環境基準を超えた工場は、即、操業停止になる可能性があるという。中央の意向に沿うよう、地方当局は違反した業者を情け容赦なく摘発し、その結果、廃業に追い込まれ、工業団地がゴーストタウン化した地域もあるそうだ。業者が操業を続けるには、環境基準を順守するための設備投資を余儀なくされ、そうすると、その投資分が取引価格に反映される構図になっている。

実はまさに今、製薬業界がこの状況に直面している。中国由来の原薬は、現在値上げの傾向にある。これまで環境に配慮しなかった故に弾き出された価格が、お上の取り締まりとあれば従わざるを得ない。その一方で、予期せぬ制度変更により、ますます利益率が細る国内製薬会社、とくに少量多品種のジェネリック医薬品を手がける製薬会社は煽りを食らう。利幅が薄くなるものの、各社との競争は続く。後発品使用促進策の「追い風」はいつしか「逆風」に転じ、「チャリン、チャリン」という響きはどうかや過去のものとなってしまったようだ。